

「現詩研」2014夏・京都合宿研究会 2日目 8月31日9時35分〜11時35分
倉橋健一×北川透対談

テーマ「1960年代の思想状況と自立性」試行の意味

テキスト・資料 吉本隆明「自立の思想的拠点」抜粋

自立の思想的拠点

わたしはいま、たくさんの思想的な死語にかまされて生きている。

「プロレタリアートVとかA階級Vとかいう言葉は、すでにあまりつかわれなくなった。代りにA社会主義体制と資本主義体制の平和的共存VとかA核戦争反対Vとかいう言葉が流布されている。言葉が失われてゆく痛覚もなしにたどってゆくこの推移は、思想の風流化として古くからわが国の思想的伝統につきまともっている。けっして新しい事態などというものではない。当人たちもそれをよく知っていて、階級闘争と平和共存の課題の矛盾と同一性を発見するのだというような論理のつじつまあわせに打ちこんでいる。しかし、思想の言葉は論理のくみだてでは蘇生できるものではない。いま失われてゆくものは、根深い現実的な根拠をもっているのだ。

いっぽうでは、言葉を名辞だけで固守しようとする傾向がある。そこではAプロレタリアートVとかA階級Vとかいう言葉が、言葉自体の像としてはどんな現実にも触れえない。ただの名辞として流布されている。これもまた思想のモダニズムとしてわが国の伝統のなかに古くから沈積している。こういう状況では、思想の言葉はそれに対応する現実を腐蝕させるためにあるのか、あるいは移ろってゆく現実から、名辞だけをしばしとどめるための符牒としてあるのかのいずれかになっている。

言葉が死語になるのは、語に責任があるのではなく、話し、書きとめているものと、それをうけとめるものに死が存在している象徴である。すると、わたしは、言葉を死の領域でしかあつかえなくなった多くの思想の、言葉を死の徴としてしかうけとれなくなった内在的な死に直面しているのだ。嘘だ嘘だとおもわずには、どんな言葉もうけとめられないし、話し、書いた瞬間から、言葉を嘘だとおもわずにはおられない失禁感があるとすれば、それがまぎれもなく思想の現状を占う深い資料になっている。

言葉の質をきめる力は、本質的には言語体験が積み重ねられてきた長い歴史と、現にその言葉がつかわれている社会の現況とである。思想的な死語を復活させる力も、したがってこのふたつのなかにしか存在しない。ある言葉を言語体験の積み重ねられた歴史のどこに位置するかをはっきりと測定すること、ある言葉が現実の状況から袂別したがつている根拠をつきとめること、処方箋はこのふたつしかない。

わたしはいま、AプロレタリアートVやA階級Vという言葉だけを蘇生させようとかんがえない。それだけを切りはなして復活させることはできないし、たんに名辞としてだけならば、現在、世界の半分のひとつとがつかっている一種の流行語でさえあるからだ。一連の思想の言葉の環のなかにこれらの言葉はめこまれておられ、その環の性格のなかに、死の原因がひそんでいる。その環をとりあげることによって、まず、これらの言葉に对象的になることが、現在の思想の状況にひとつの里程標をたてるゆえんである。

各時代は、それぞれ思想の尖端をつとめる言葉をもっている。一九二〇年代から三〇年代にかけてそれはAプロレタリアートへの階級移行Vであり、それから四〇年代にかけてはA八紘一宇VやA東亜協同体Vであった。四〇年代から五〇年代にかけてはA社会主義体制VとA資本主義体制Vの対立と共存であった。

しかし、現在、思想はどんな尖端的な象徴をもっていない。それぞれの主観のなかに小さな尖端があり、それはランダムな方位をさしているといった典型的な混乱をみせている。もちろん、それぞれの時代は、渦中にあるものとして混乱しかないとしても、現在ほど何が去って遷ることはないか、何がやってくるかを知らない喪失の時代はないのだ。どんな指導の言葉も、明日を保証されるための基盤をもっていない。

こういう時期には、名分を現実にかかわりなく固執すること、移りやすい尖端的な言葉よりも連続的にしか移ってゆかない土俗の言葉に生命をもとめようとする態度とは、同じ安易な固定化を意味している。また、移りやすい尖端的な言葉を、世界のすぐあとから追いついて追いつくことも安易なモダニズムである。わたしは、すでにこれらすべてを等質の態度とみなしてきたのである。

わが国では、思想の尖端をゆく言葉は短命で移ろいやすい。それを補償するように、なかなか死滅しない土俗的な言葉が地中にひそんでいる。この土俗的な言葉の百年ちかくもかわらなかつた象徴をA天皇制Vという語で象徴させることができる。わが国で思想の問題というばあい、その時代の尖端をゆく言葉の移ってゆく周期を追うことであり、その周期があまりにはやいで、一世代の間にはAプロレタリアートへの階級移行Vという思想を体験しながら、四〇年代にはA八紘一宇VやA東亜協同体Vに移り、現在ではA社会主義VとA資本主義Vの対立と共存という課題にとびうつるということを生涯に体験できるほどである。また、一つの時代の尖端的な言葉が死滅するのは、思想の内在的な格闘によるのではなく、外部の状況によるだけだから、いったん埋葬された思想は、十年あるいは二十年までふたたび季節にむかえられて新しい装いで再生することができるほどである。

この現象は尖端的な言語と土俗的な言語との交替であり、古典的な転向論のカテゴリーでとらえると、反体制思想と体制思想の同一人か別人による交換であるようにみえる。しかし、ほんとうは尖端的な言語と土俗的な言語のあいだに振れの構造があるために、思想言語の全空間を想定し、見透すことができなかつたという問題に帰せられる。わが国で、尖端的な言語をえらぶこと、土俗や農耕の言葉の永続的な流れをえらぶことが、ともに不毛であって、たんに季節のような周期に身をゆだねるほかにないのは、この両端に古典マルクス主義や戦後プラグマチズムが想定しているような線型(リニア)の媒介関係がないからである。

土俗的な言葉に着眼し、それをおしすすめて思想の原型をつくらうとしても、尖端的な課題にゆきつくことはできないし、また逆に世界の尖端的な言語から土俗的な言語をとらえかえすことができないという結節や屈折の構造があり、戦前から戦後にかけて、大衆的な課題を視界にいれようとした思想は、この不可視の結節をかんがえることがで

きなかつたために虚構の大衆像をとらざるをえなかつた。

わたしが課題としたい思想的な言葉は、この各時代の尖端と土俗とのあいだに張られる言語空間の構造を下降し、また上昇しうることにおかれている。わが国では大衆的な言葉に固執する思想は、かならず世捨て人の思想である。おなじように尖端的な言葉に固執する思想は、かならずモダニズムの思想とならざるをえないのである。わが国の古典マルクス主義の言語思想の歴史は、昭和初年以來、尖端的な言葉から大衆の言葉をとらえ、あるいは大衆の言葉が尖端的な言葉をとらえることに、A階級V的な課題があるかのようにかんがえてきている。しかし、よく想定すればわかるように、この方法では現実がどこかで幻想に屈折し、体験がどこかで知解に屈折するために、総体的な課題に到達しえないのである。むしろ古典的な転向論のどれも指摘したように、土俗から尖端へ、尖端から土俗への回帰しかおこらなかつた。問題の発端は、現実がどこで幻想に折れ、どこで体験が知解にかわるか、その屈折点の構造をあきらかにすることにこそあった。

戦後プラグマチズムの言語思想は、鶴見俊輔に象徴されるように、戦争期のモダニズムとしての敗北をふまえて、土俗の言葉に着目してきたが、土俗的な言語が原型ではあるがそれ自体ではなにも意味しないこと、あるいはなにも意味しないが原型でありうること、という矛盾した構造をもつことをとらええなかつた。ここでは、大衆的な言葉がそのまま大衆的な思想の現実であるかのようにあつかわれてきたのである。

たとえば、

つれなのふりや

すげなの顔や

あのやうな人が

はたと落つる

(隆達小唄集)

こういう俗語は、戦後プラグマチズムの言語思想からは、つれないふり、すげない顔をしていた男女が、急に相手を好いてしまった思いがけぬ男女のあいだを唄ったもので、土俗的な色恋ざたの実相がえがかれていたものとなる。そしてこの庶民の色恋ざたの機微をとりあげること自体に無量の思想的な重みがこめられるのである。土俗のあいだを、また何となく、原型的であり、そしてこの何となく、ということに思想の意義が発見される。何となく、被支配者であり、また何となく、この戦後プラグマチズムの態度は、何はともあれ、土俗の実相を真相として探り、目録を性が想定される。もちろんこの戦後プラグマチズムの態度は、古典マルクス主義の態度に先んずるものであった。あつめなければ、何ごともしまらないという踏み込みとして、古典マルクス主義の態度に先んずるものであった。たとえば、古典マルクス主義の言語思想からは、この俗語には、まだ目覚めていない状態の大衆の情緒が、封鎖された色恋ざたの主題のなかにこめられて唄われていることとなる。この古びたうすくまった情緒を開明的な感覚にまで変革することが言語思想の課題であるという問題意識はうまれても、俗語自体として探るといふ踏み込みはうまれにくいのである。

しかし、わたしの言語思想からは、人間がしばしば、その表現と現実とを逆立していることがありうるし、人間と人間との見実的な関係のなかでは、しばしば表現は、現実にある状態と逆立したり、屈折したりしてあらわれ、その逆立ちや屈折の構造のなかに言葉の現実性があることがみちびきだされる。そして言葉は、しばしばその表現と現実との間に割られるプロセスの累積としてみるべきことが理解される。瞬間的に視える現実性の構造から縦深的に割りだされるプロセスの累積としてみるべきことが理解される。

素っけないふりをしていた男または女が、急に相手といふ仲になってしまったという表現は、はるかに人間のあいだの関係の意識が、逆立した契機をもって現実に存在していることへの認識と対応している。この俗語が男女の関係のある機微をとらえているとすれば、ここに表現された機微なるものが、人間と人間が社会にあるばあいの普遍的な契機につながっていることを俗語の言葉そのものが内包しているからである。

このように捉えうる言語思想は、積極的な主題の表現がしばしば現実における主題の喪失に対応したり、土俗的な言語が、しばしば支配への最短の反映路であったり、A階級V意識の強調が、じっさいはA階級V概念の紛失に該当していたりすることをおしえる。わたしの知っているかぎりでは、こうした問題にたいしてはっきりした手続きをもっている言語思想は存在しないのである。

思想的な死語が、なせ死語でしかありえないかといえは、論理的にはこの手続きをもたず、言葉が言葉として先験的にかんがえられているからである。わたしが古典的党派性の契機といふとき、それがプラグマチズムとプラグママルクス主義にたいする決定的な対立の形をとらざるをえないのは、わたしもが言葉をあたかもそう欲したために、そう表現されたものとみる、これらのべったりとした機微的な言語思想の渦中にあるからである。

機能・能率・効用という近代経済学の語彙がこれらの言語思想にますます簡便化の根拠をあたえる。そして世界の社会経済の構成の変化がこの方向を裏づけているようにみえる。これらの党派的な言語思想は安心してよいであろうか？

そうはいかないのである。社会が、ますます機能化と能率化を高度におしすすめてゆくとき、言葉は言葉の本質の内部では、ますます現実から背き、ますます現実からとおく疎遠になるという面をもつものであり、言語は機能化にむかえばむかうほど、この言語本質の内部での疎遠な面を無声化し、沈黙に似た重さをその背後に背負おうとする。つまり、コミュニケーションの機能であることを拒否しようとする。

プラグマチズムとプラグママルクス主義の言語思想は、この観念の運動の固有な面が、思想として意味するものをつかまえることができない。たんに言葉についてだけではなく、人間の観念がつくりあげることができるすべての領域にわたってこの欠陥は拡大されている。それは世界の理解にかかわっている。

2

どんな思想も、言葉によって語られ、書かれるということは、途方もなく思想のもつ位相を混乱させるものである。言葉そのものの内在的な構造のなかでは、言葉の歴史の制約から自由に飛躍して過去を断絶することはできないし、言葉はその本質の外部でそれを発したものが、いまだどんな現実世界に生きているかという問題をたちきることがまったくできない。これは言葉のもつ矛盾した性格である。かれがまったく新しい世界をたずさえて言葉の表現に参加したとしても、ひとりだけで言葉の歴史の現在にたっているだけだし、また、どんな密室のなかで言葉を練ったとしても、

現実社会の息づかいのなかに流動している。だから欲しないにもかかわらず別の意味をはらんでしまうという言葉の性格は、かならずしも全部が個人によって左右できる自由ではない。かれは鳥のように鳴いたにもかかわらず、その声は鳩のように貫徹されるということが、現実の世界で、言葉を決定づけているのだ。

この矛盾した性格が言語思想についてのプラグマチズムと古典マルクス主義の立場を傷つけてきたことは確かである。それらは、言葉を確定するものが言葉という機能であり、言葉の概念を確定するものが社会的現実であるという、線型の等式によって言語思想をおしすすめてきたのである。その結果もたらされたものが文学・芸術の上で何であつたか、思想のうえで何であつたかは、多くの表現史によって確かめることができる。

……………(ルカーチ) 批判の部分省略……………

わたしは家系のないことを誇りにしているので、古学派的にふるまうのが好きではないが、このばあい必要なので言及する。マルクスはAプロレタリアートVやA階級Vをみちびきたすのに、社会的人間と経済社会の構成とのあいだからはじめる直接性から出発していない。かれは周到にも、人間と自然との相互規定性という媒介と、宗教・法・国家というような、社会的人間の幻想的な疎外の性格という媒介をもつけ、その両端からおもむろに人間の社会的な存在の像を浮かびあがらせている。じじつ、このような媒体がなければAプロレタリアートVやA階級Vは、思想の言葉として成立しないのである。

「社会的存在の客観的現実性」としては、人間はただか無数にちがった境涯にばらまかれた知識や貧富や地位やらのちがいとして存在し、このちがいによってさまざまにちがったかんがえをもち、幻想をうみだしているだけである。プロレタリアートもある場合でブルジョワであり、ブルジョワもある場合でプロレタリアートである。都市民と農民だけが自然との関係で普遍的な位相のちがいとして存在しているにすぎない。Aという人物にとってBが社会的特権人であるように、BにとってCは社会的特権人だという関係しかない。ルカーチのいうようなところでは無数にちがった社会の意識がばらまかれていて、AプロレタリアートVもA階級Vもないのである。そしてただ無数の層の共同性があるといえるだけである。

こういった思想言語の一連の環については、わたしたちはじつにたくさんのかものを文学や芸術から政治思想にわたって喰わされてきている。現実には体験しているものをよく観察したところと、理念として喰わされている悪食とをひそかにおもいくらべて驚いたことがないものはまれであらう。

AプロレタリアートVやA階級Vが、思想の言葉として成立するためには、どうしても宗教から法へ、法から国家へというような幻想の歴史が媒介として論理のなかにはいってこなければならぬ。

まず宗教が人間にとって絶対者である神の意識を幻想的にうみだしたとき、この幻想と人間との関係は、無限なものとの限りあるものとの自己意識のなかでの二重性になってあらわれる。これは祈りやお告げによって、あるときは人間が無限なものになりたいと願ひ、あるときは無限なものへの崇拜となってあらわれる。そして、このような自己意識の内部での無限と有限との葛藤は、現実の社会では他の人間との関係となってあらわれるほかはない。人間は他の人間になりたいと願ったり、お告げをうけたいと祈ったりするのである。

こういう宗教の意識は、もし人間が動物にちかひように、食べたい自然のものを食べたいときに食べて生活することができなくなり、すこしでも社会を構成して利害を共にするほかに生活してゆけなくなるまでになると、はじめはただ能力の大きいものと能力の小さいものとの優劣関係しかなかった人間の社会構成が、この宗教の意識にたいして現世的な利害を対応させるようになるのである。こうなれば宗教は掟(法)の意味をもたざるをえなくなる。そして法は、じぶんに住みつことが出来る人間の社会の構成をかぎってゆく。それは国家の原型のもんだいである。

このように人間の幻想的な疎外が、しだいに現世的になってゆき、はじめはたんに幻想の自己意識の内部での表出であったものが、現実につくっている社会の生活の関係と対応するようになって、はじめて幻想的な理念であるとともに、現実をも象徴するような言葉が生じることが出来る。AプロレタリアートVとかA階級Vとかいう言葉は、このような幻想の歴史と「社会的存在の客観的現実性」とが、二重に関与しないかぎり成立しないのである。そしておなじように、言葉は幻想の表出と現実とにむかう対応性という二重化された象徴として言葉なのであって、ルカーチの思想言語がかんがえているように、またプラグマチズムが主張するように、「社会的存在の客観的現実性」との対応や指示によって言葉なのではない。AプロレタリアートVとかA階級Vとかいう理念の言葉が、生命をふきこまれるために、この言葉の現実にたいする水準と、幻想性にたいする水準とがはっきりと確定されていなければならぬ。ルカーチに象徴される古典マルクス主義の哲学では、はじめから生命をふきこむ余地がない言語思想が支配しているのである。

わたしが、これはおかしいこれはおかしいと感じながら批判的にかかわってきた世界思想は、事実と言葉との密着という詐術によってしか成立しないものであった。これに気づいたとき、欠陥を對象とすることは、たとえ批判または否定であつてさえも、對象的欠陥にしかすぎないことを体験的にしたのである。すくなくともわたしの言語思想が自立の相貌をおびて展開されたのはそれ以後である。マルクスの思想は、わけ入れればわけ入るほど、古典マルクス主義とちがった貌をしてあらわれてくる。このことは、多くの古学派的な思想家が気づいて指摘しているところである。ただ古学派的な思想は、祖を離れて祖に帰るといふ認識の運動を踏まないため、多くが解釈の学にとどまっており、そのために思想的な拠点をつくりあげることができなかったのである。

……………(サルトル) 批判の部分省略……………

3

わが国の政治思想史の文脈をながめてみると、おおすじのところ、講座派の思想は共産党に流れてゆき、労働派の思想は社会党に流れてゆき、これらの変態である社会ファシズムの思想は、このふたつの党派に分配されていることがわかる。いわゆる超国家主義の思想だけが右翼的な諸形態をとって潜在していることがよく了解される。そしてこれらの古典的な党派をわかつた分岐点はA天皇制Vの問題にほかならなかつたといえる。

A天皇制Vの問題はなぜ過去をなやませ、なぜ奇妙な独特の脅威と吸引力をもってすべての古典的な党派性の概念を混乱させたのだろうか？

わたしたちはここで古典的な党派性を棄揚するもんだいに当面するとともに、国家論のもんだいにゆきあたっているのである。

よく知られているように、過去に、講座派と労働派のあいだで近代日本の国家権力の性格についてはげしい論争がかわされ、その論争はそのままかれらの党派をわかつものとなった。さまざまなニュアンスのちがいはあっても、講座派によってとらえられた近代国家の像は、明治維新らしい天皇制絶対主義の性格をもちつつけながら、ブルジョワジーの興隆とともに、地主とブルジョワジーの両端の利益を代表するものに転移し、それ自体が絶対主義としての独立性を保ちつづけた権力であるとされた。労働派によってとらえられた近代国家は、明治維新によって成立した天皇制絶対主義が、ブルジョワジーの興隆とともにさまざまな遺制をのこしながらも、ブルジョワジー国家権力に転化されたというものであった。

………講座派と労働派の（日本資本主義論争）の部分省略………

日本の古典マルクス主義によってとらえられた天皇制国家は、当然ながら、世襲的な祭司であり、儀礼主宰者であり、原始シャーマンの宗教信仰の対象であることよって、近代思想として、思想的強力でありえた天皇制国家の理念権力としての強大さと特殊さをとらえることができなかつた。それは、宗教・法・国家の古代からの累積された強力を保有することでもちうる権力性を、国家本質内の本質としてとらえる方法をもたなかつたからである。

明治憲法の第一条が「大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス」とうたつたとき、政治的国家としての天皇制は、宗教と法の歴代の累積する思想的強力をもふくめた総合性を意味したのである。この近代日本の国家本質を、たんに、経済社会構成から類比しようとする古典マルクス主義の方法は、何よりもわが国の国家論でもっとも欠陥をあらわにしたということが出来る。

社会的国家の概念からは、天皇族はたんに大土地と財産の所有者であり、その所有の程度におうじてブルジョワ的な社会的特権力をもっているにすぎない。しかし、政治的国家の概念からは、古代以来の宗教と法の理念を綜合する権力を意味した。この国家の独自の性格は、すくなくとも講座派や労働派によっておこなわれた資本主義論争の範囲をまったくこえるものであつた。

法・国家というものは、何らかの意味で人間の観念が無限の自己としてうみだした宗教が、個別的なものから共同的なものへ転化され、それによって社会的国家の外に国家をうみだしたものである。信仰がもっている憧憬と戒律の二重性は、それゆえ法や国家の本質につきまといつている。

国家本質の内部では、国家は宗教を源泉としている。この国家本質は、そのまま矛盾なしに社会的国家と接続したり、対立したりすることはありえない。一般的にいって国家の成立ということと、経済的社会構成が国家を成立せしめるまでに発展したということは、まったく別問題であることを、古典マルクス主義はとらえることができなかった。講座派や労働派がつかずき、いままその流れをくむ古典マルクス主義がつかずいていっているのはその点である。

宗教が人間にとって無限の能力でありたい願望として外にあらわれ、それが現実には有限の能力である人間におおいかぶさる強迫と憧憬であるとすれば、共同的な宗教である法や国家が、「万世一系ノ天皇」にまで近代理念として累積されたとき、これを信仰思想の対象としてかかえり理念がうまれるのは必然であつた。ここに近代日本に特有な超国家主義がうまれる基盤があつたのである。超国家主義が丸山学派がいうように、論理と心理と病理のもんだいでもなければ、古典マルクス主義がいうようにファシズムの問題でもないことは論をまたないことである。

超国家主義は、北一輝や大川周明に象徴されるように、天皇制軍事社会主義から、権藤成卿や橋孝三郎に象徴されるような天皇制農本主義にいたるまで、さまざまな形をとつて出現した。この思想的な形態は、経済社会構成と類比される意味でとらえられた絶対主義やポナパルチズムの概念の水準でとまれば、とうていとらえることができないものであつた。自然宗教の幻想が、現世に降つてゆくばあいの思想的強力がはらむものを国家として考察することなしには、とうていつかみえない思想力をうみだしたのである。

超国家主義の思想は、国家本質の内部では、西欧の近代国家のなかで、キリスト教的な急進社会主義や、クエーカー教的な共同主義が成り立つのとおなじ位相でとらえられる面をもっている。ただ、西欧の宗教的な社会主義が究極には個人の信仰の理念に収斂するほかないように、超国家主義は、究極的には天皇を超越的にいたかく自然的な共同体の観念に収斂するほかないのであつたのである。プロテスタント主義と資本制とを結びつけて考察するM・ウェーバーを評価することを知っている丸山学派が、超国家主義を反動の論理と心理のもんだいにしか還元できなかったところに、その国家理論のモダニズムの不備がよこたわつてゐる。

北が天皇制を逆手にして資本主義を廃絶しようとする方策をのみだし、権藤成卿が天皇制国家権力と反国家権力としての農村共同主義を折りあわせようとして「国家V」と「社稷V」というふたつの概念をのみだしたというようなことは、古典マルクス主義がかんがえるよりもはるかに深刻な意味をはらんでいる。なぜならば、国家本質論の内部では、

キリスト教社会主義の存在を認めるならば、天皇制社会主義も矛盾なしに認めねばならないという側面を、超国家主義はもつていたのである。講座派や労働派が天皇制国家の把握に失敗したのは、宗教的な疎外の累進した共同性として法・国家の本質をつきつめるといふ面が欠落していたからであり、丸山学派がこの把握に失敗しているのは、国家本質論をもつていないうえに、古典時代のリベラル・モダニズムの戦争体験を刻印されていたからである。

「制度の変革は、さらに端を改めて詳説せねばならぬが、制度がいかに更改されても、動かすべからざるものは、社稷の観念である。衣食住の安固を度外視して、人類は存活し得べきものではない。世界みな日本の版図に帰せば、日本国という観念は、不必要に帰するであろう。けれども社稷という観念は取除くことができぬ。国とは、一つの国が、他の国と対立する場合に用いられる語である。すなわち世界の地図の色分けである。社稷とは各人共存の必要に応じ、まず、郷邑の集団となり、郡となり、都市となる。その構成の、内容実質の帰着するところである。各

国ごとくその国境を撤去するも、人類の存在する限りは、社稷の観念は損滅を容すべきものでない。」(権藤成卿「自治民政理」)

ここでいわれている「国」が政治的國家にあつており、「社稷」が社会的國家を意味することは、たやすく類比することが出来る。権藤の政治思想の範囲では、「国」のなかに天皇制が住みつき、「社稷」のなかに農民の共同体が住みついてゐた。権藤が平等な農民の共同体のようなものを構想しながら、超國家主義一般のなかに姿を没してゆかねばならなかつたのは、かれのいう「社稷」が、矛盾や逆立なしに「国」の概念に到達しえないことを洞察しきれなかつたためであつた。すくなくとも権藤は古典マルクス主義よりも一歩ふみこんで「階級V」の概念が發生する基盤

には着眼したのだが、政治的國家と社会的國家を二重の屋根のようにかんがえたのである。権藤がもしも、郷土の集團となり、郡となり、都市となるとかんがえた「社稷」を、そこに抽出される約定(法)の面を把握していたとすれば、これらもまた小さなA國家VとA社稷Vに分立していることを洞察しえたはずであり、「國」と「社稷」は二重の屋根ではなく、現実の生活と幻想の生活とが法によって対立する法國家本質であることをつかみえていたはずである。

純思想的に問題をおつかうとすれば、古典マルクス主義の近代天皇制國家論は、近代主義と社会ファシズムまでその範囲にひきよせることができた。しかしその方法がどうしてもとりのこした空洞は、超國家主義をうみだすばかりではなかったのである。

いうまでもなく、わたしたちの思想状況はいまも、思想を識別するのに古典的党派をもってし、個々人の心情的なさわりを進歩派とか保守派とか呼びならわす常識のなかにいる。しかし、すべての常識的な思想の党派のなかでは、かれがもっとも憎悪するのは、かれのもっとも近い隣人であるという原則しか実際は存在してはいないのだ。現在の情況は、ますますこの自己偽善の構造を追い詰め、ひとびとが鳴り物入りの党派にみている虚像は、ますますその実体から遠ざかっているのである。わたしが古典的な党派の理論を批判するとき、それは同時にこれらすべての党派性を対象化しようとする課題によってであり、けつしてこれらのように古典的超國家主義を思考の範囲からとりこぼしたり、回避したりする方法をえらばないのである。超國家主義は、純然たる國家理論の問題である。

4

わたしの思想言語からは、ナショナリズムという概念は、世界の尖鋭的な思想の言語を課題とするときに必然的に伴われる土俗的な思想の言語という以外のどんな意味ももちえない。それは思想が不可避的にもなう象徴ではあっても、けつして積極的な契機ではありえないのである。世界史の尖鋭的な課題を思想的に提起しえないかぎり、ナショナリズムの問題も発生しうるはずがないのだ。

ここ一、二年のあいだに、わが國でおこなわれているナショナリズムの論議は、これとはまったく質がちがっている。それらは、日本資本制國家を前提として恒久化したうえでおこる政治的な、あるいは経済的な、あるいは思想的な技術問題は如何という意味しかもっていない。そこには尖鋭的な思想の言葉にとりつこうとする緊張がないから、土俗的な課題もともなわれることはない。日本資本制國家の資本制の性格一般のもんだいがあるだけである。そこには超國家主義がもっていた衝撃力もなければ、古典マルクス主義がもっていた先験的な政策論の大だんびらもひらめかせる余地はないのである。

わたしたちは、ただ思想の風流としてのナショナリズム論議に当面しているだけである。そしてこの単なる風化にすぎないものが、近代主義やプラグマチズムの機能的な衣裳をつけているところにはほんとうの問題があらわれている。つまらぬ進歩派が、反動の復活であるかのように大さわぎしている林房雄の『大東亞戦争肯定論』で、わたしがもっとも失望したのはこの点であった。戦争期に林房雄がもっていた思想の遠心力は、ここではすべて喪われ、風化した近代主義の変態にかわっている。林房雄が戦争期に『動皇の心』などでももっていた超國家主義の緊張と軋みと弾みはあとかたもなく、ただ近代日本の國家についての解釈のまがいか、もともととるにたらない学者の論議を相手にハ股をすくう形で展開されているだけである。

.....林房雄批判の部分省略.....

上島 圭平 批判

國家は國家本質の内部では、宗教を起源として法と國家にまで普遍化される觀念の運動のつくりあげたものであり、この本質の内在性は、社会の経済構成の発展とは別個のものとして、ただ巨視的な尺度のうちで対応性が成り立つものとみなすわたしたちのかんがえは、言語本質の内在性を自己表出とみなす言語思想と一致している。そしてこの考察は、言語を指示性・コミュニケーションとしてみるべきではなく、言語本質の内部では自己表出であり、その外部本質では指示表出であるような構造とみなすことをおしえるのである。

國家は國家本質の内部では、種族に固有の宗教がさまざまな時代の現実性の波をかぶりながら連続的に推移し、累積された共同的な宗教の展開されたものであり、國家本質の外部では、各時代の社会の現実的な構成にある仕方に対応して変化するものとかんがえることができる。

わたしの認識では、世界史の動向が、古典マルクス主義とプラグマチズムの融着の方向をさすとかんがえる現代マルクス主義と戦後プラグマチズムの思想は、ただ幻想の世界体制を自然過程のようにみなす矛盾を語るだけで、どんな意味でも転倒の課題を荷ってはいない。わたしは國家の本質とわが國におけるその実体をこれらの党派のとってきいた誤解から解放しようという課題をつうじて、そこから発生する思想的拠点から、これらの党派的思想に逆流する方法をえらばざるをえない。

わたしは、現在の思想的情況のなかで、古典マルクス主義の諸変態と戦後プラグマチズムの思想がとっている立場にたいして原理的に対立するもんだいを、思想の基本的な言葉について羅列してきた。ここに、現在の思想の課題のすべてがあるわけではないとしても、中心的な課題はこめられている。なおしばらくの間、思想の基本的な言葉について、その概念、それに近づく方法、世界にたいする態度にわたって古典的党派と異同を争わなければならないだろう。これらの争点において、古典的諸党派が内在的に棄揚されるのは必至であり、この意味でわたしにはただ時が欲しいだけである。

その他の資料

① 原点が存在する (インキ)

谷川雁

まゝでワグナア歌劇の装置を思わせた。みすばらしい寝衣にふくれて、私は谷の横倒しにされた栗の木に腰をおろしていた。銀河ほどの幅に空をのこしたまま兩岸に

茂りあう樹木と湯ききった砂がくりだす洞窟——気流

は封をきった手紙の読みおえた一枚一枚を下手にとびした。入院中の私にとって、そこは非法法の聖所であり、ときに警察が追求する文書をつめたく透きとおる心でひらくことにもあった。三年前のことである。

五・Yの手紙。或る新聞の学芸部に一脚の椅子をもち、花言葉をつければ彼は「にがにがしい善意」だ。精

神鑑定書なら「ジャナリズムと詩の相乗作用」と記入

すべきた。新聞記事も詩も過ぎゆく時間がうんだ現象にすぎぬと心得ているうちに、信仰を抱きまたうちくたいた。いまは不定形の職闘心だけが陰影にまぎれて残っている——

飲みかけのコーヒーのようなインクで

いまやわが國のありとある「詩人」に向って新飯

名使いに對する賛否をはじめ再準備はか非かにいたるまでアチーヴメント・テストを行う必要がある。

——日本詩人に對する百問というのを考えてほしい。彼がきまじめになる時、やや教化趣味があらわれるのはなせだらう。読み終えてマッチをすった。蒸溜れ日のために炎はほとんど色がなかった。

私はE・Yの原則に賛成した。けれど詩とは留保なしのイエスか、しからずんば痛烈なノウでなければならぬ。詩が来らんとする世界の前衛的形象であるかぎり、その証明は詩人の血をもつて明らかにせねばならぬ。詩人とは何か。

まだ決定的な姿をとらず不確定ではあるが、やがて人々の前に巨大な力となつてあらわれ、その軌道にひとりびとりを微妙にもとらえ、いつかその人の本質そのものと化してしまふ根源的勢力……花々や枝や葉を規定する最初のそして最後のエネルギー……その出現に先んじて、その萌芽、その胎児のうちに人々をして知覚せしめ、これに對峙すべき心情の発見者、それが詩人だ。

このような人間が保守的な世界に一票を投ずる可能性があらうと考へたことは二重に困難なことである。第一に古くなつてしまつた力は根源的ではありえない。第二に根源的でないものは創造的ではない。だから進歩的なものに「尾をふる」者は——詩人ではない、というこゝも成り立つ。

E・Yの形式にしたがえば、私の第一問はこうである。汝、尾をふるや否やか。

試行のために「試行」を原稿の創刊のこぼし

のぼせつきの阿Qと、しつぽを垂れた阿Qとにかこまれてこの雑誌を作る。資本の物神化が極限までおしすすめられる時期、したがって物神的観念がいわばみえない工作機械として生産機構の中枢に意識的におかれる時期——そのときには何が起るのか。

いまあるがごとき世界がくりひろげられるのである。すべての定型から詩的意味が失われる。あらゆる擬制は一片の劇的效果もあげえない。言葉と行動はただ、比喻を破壊する比喻の自己否定的な連鎖としてのみ息づくことができる。

かくて、怖ろしいといつてよいほどの無感動の波が襲っている。この世の色界、音域、形相の一切を動員し、どのように組みあわせてみても、そのヴァリュウはめのまえのささやかな存在の尖端にかけられた重みに匹敵することができないかのごとくである。感動がありえないのではない。それは定着しないのだ。陰影すらも幾百万分の一秒ほどの超高速で資本の無政府性の側に吸いとられ、擬制の建築を構成する砂利となるか、虚空へ放散するかしかならないからである。

この現代的無感動の凄まじさに関する単純な「不感無覚」、あるいは楽天的な「方法意識」をわれわれはあざわらう。それは同じ病だ。物量主義と呪術崇拜の背中あわせの癒着だ。それはいずれも今日を特徴づける規範一般の崩壊現象を理解できない、甘ちよろい權力意志にすぎぬ。そしてそれこそ今日、現代独占に最高の超過利潤を保証している形而上的な資本財なのである。

權力とは何か。言葉の深刻な基底部をみつめるべきである。人間が自己のなかの、対象化されねばならず、かつまた対象化されつくすことのない第二の一人称をいかにして第一の三人称に転化せしむべきか、比類を絶する困難につきあたっているとき、そのはげしいKOパンチに耐えられず、その戦いを避けるために、避けた結果としてばらまかれる力の合成の理念とは何か。

われわれは真正の權力を建設しようと努める。われわれがいま手もとにたしかめうるのは、思想が自己を統一しようとするときに起る剝離の感覚だけである。そこから頑強な無名の思想を自立せしめることよりほかに、權力を否定する権力への道などありうるはずがない。それはわれわれの絶望の最終的な表現であるから、変ることはない。肉体をかけた得られる一滴の思想感覚と、全思想をあげて得られる一滴の肉感との交錯の上に、それは築かれるであろう。賭けは全面的でなければならぬ。小銭を残してはならぬ。

言葉もなく立ち、言葉もなく戦わざるをえない過渡期の力学を追求するために、この雑誌は生まれた。われわれ——それはだれとだれのことであつて、だれとだれのことではないのか。紛乱はまずそこから始まりうるが、雑誌の目的に照らすとき、一人称複数の確定はさしあたって必要でないというのが、われわれの見解である。

頬白が一羽あたまをかすめた。思つて人間の思想は幾度か転回してまたそのこぼる。何をもちつてその者最後の思想と呼ぶか。時は常にがしかの應力で人間からその思想をひきはがし固定する。その時はじめて人は一瞬の己が影に責任をもたねばならなくなる。誰に向つて？

おそろく私達が凛然と感じているよりももっと多くの人々である。恩恵は一種のエネルギーである。エネルギーは不滅である。私は日々まわりの愛する者たちに無数のイエスとノウを投げつける。しばしそれは自分自身へこたます。巨大なノウが響きわたる。私はうちのめされる……

人々は遠くにいるのだ。そして私を動かしているのだ。彼等はさうする権利がある。なぜなら私も彼等を動かすのだから。彼等——それはいつい何者なのか。口も聞かず手も触れないのに、私の死すら支配している彼等は……

ファイスト……その事を話すのは一体不可能なのだ。それは「母」達だ。フアウスト(梵く)母達か。フアウスト 身の毛が立ちますか。

二十世紀の「世論」はどこに居るのか。寂しい所、歩いたものない、赤かぬのはどこにあるか。現代の政治的チエツが幾層も幾層も深く流れて深淵(アビス)まであるのか。そここそ詩人の座標の「原点」ではないか。

私は立ちあがった。眼の前に遠い何時か火山からほうりだされた岩があつた。汝、彼地にゆきて彼等を見しや。彼等を知れるか。私は自らに問うてみた。私の見たもの——それは、馬轡を盗みくいなながら原をこらえることができぬ榮養失調の兵隊であつた。鳥の聲が叫んでいる盲の原爆症の男だつた。星の燈台をぼしながらギータアを弾く特務警察の青年達であつた。六人で二組の布団をオルグの私に一纏めした金属工であつた。出奔した夫の留守に其宅を盗出されぬために労働と交渉した就夫の妻であつた。首をさられた私を追いかけてきて十円を手に入れた掃除婦であつた。握りつぶしひりひり痛むほど握り返す牛飼の少年であつた。フェルトの草履が一年の労働で買えたとき紡績女工であつた。

▲谷川 一郎 雁
▲村上 一 郎
▲吉本 隆 明
(▲起草責任者)

試行「創刊号」後記

後記

「試行」はここに、いかなる既成の思想文化運動からも自立したところで創刊される。

もちろん現在の状況そのものがわたしたちに負わせている客観的な条件や制約そのものから、必然的にわたしたちは自由ではない。わたしたちがそれぞれ抱いているヴィジョンと、げんに集まりうる同人がかりうじて三人であり、この三人がそれぞれの課題を負っているという事実から出発しなければならぬという現状とのあいだに、たくさんの過程と困難とがよこたわっている。

げんみつにいえば、わたしたちはおおくの思想、文化運動のように量をもって場所を占めることを第一義としない。しかし、わたしたち同人のただ一人をも、またおそろくは寄稿者のどの一人をも、どんな量をもってもち倒すことができないことに自負をもつ。

わたしたちが力のかたむけて発表する作品、論文のたぐいが、どれだけ独走しようとも、たれもおしとどめることはできないのである。

まず、わたしたちは前運動の段階から、いかえれば混沌の段階から出発する。同人は もちろん、寄稿者も、自己にとつてもっとも本質的な、もっとも力をこめた作品を提出しつづけるという作業をつづけながら、徐々に

結晶するという方策のほかに出発点をもとめないし、もとめることにあまり意味をみとめない。しかし、わたしたちの結晶がどのような力をもたらす、どのような責任を負うまで成長しても、その責任に充分たえうるだろうか、おもう。

てそういうものの結晶が実現することがさしあたって現在の状況のなかでかんがえられるヴィジョンである。
この雑誌は、まずはじめに現在の思想、文化の状況がはらんでいる多様性と混沌とを内容によって反映させるだろう。安易な統一や徒党性をもっとも低い位置におかなければならぬ。しかしかんがえるからである。しかしまたたえず雑誌自体が停滞し、物神化されることを警戒しなければならぬ。かんがえていく。

めにこの雑誌は解放される。特定の分野を排除したり、特定の分野に自己を限定したりすることはありえない。
表紙のデザインをしてもらった黒沢氏にはとくに感謝する。
(吉本隆明)

一九六一年九月一五日 印刷
一九六一年九月二〇日 発行
編集責任者 吉本隆明
(東京都台東区仲御徒町二ノ三十二)
発行所 試行社
(東京都千代田区神田美土代町十二山京ビル)
(電話二三一―三九五)
定価 一五〇円
―年分概算 千とも 一、〇〇〇円

「試行」第5号 1962.7

「討論」 「状況」と「行動」

その他

谷川 雁
村上 一郎
吉本 隆明
(▼印、速記責任者)

「アクチュアリテイの美学」を排す

谷川 今日における運動論——かならずしも「変革論」といわないが——が必要とされるいくつかの基準があると考えられますが、ね、そいつを明確にすべきだと思います。それは、「組織論」といった

行動を起こす。その場合の「行動」とは、状況を少しよくすると、世の中のためにつくすとかいうものではない。敗北なり潰滅なりをもっと自分のなかへ叩き込む。インテリはそいつがぐるぐるって廻り込むとこを、インテリ的な図式で追ってゆく。もともとインテリにそのぐあいを説明してやる気もいまはしないが——。
ところで、右にいうような論理の対極に、とことん自覚的な「永久革命論」がおし進められる。進歩なんかあるのか？ ない、おれという主体に即していうと、追いつめられるだけだという極限——その二つの極の相剋という問題点が出てくる。
以上の(一)根元的革命主義、(二)永久革命論、この相剋のなかでしか、行動は考えられないんじゃないか？ わたしはだいたいこう考えるんですね。

村上 行動に對置される言葉が、非行動か反行動か、不行動か、怠惰か、レジャーか、それはいま科学的・論理的には規定してみる気もないが、たぶん反行動というようなことだったらそれ自体が行動なのだろうし、毎日何も行動していない自分というものも考えられない。ぼくがいま改めて意識して「行動」という以上は、たぶん自分の現在も、また漢と考えている自分の明日をも、積極的に、つまりくるしくとも否定してゆくというのが「行動」だろうと思う。自分がほんとうに行動するということは、吉本君の言葉(「詩とはなにか」)を使えば、世界を凍らせ、自分を凍らせてしまうことかもしれない。沸騰させてしまうことかもしれない。文学なんてのはいわばそれを自分の情念分析のなかでしようとするので、それはひどいものなんだ。だから文学という世界は、回顧的に見えたり、

ものより、もっと原理的に語られるべきだけれども。

吉本 あなたの「行動」というやつね、そいつをやってくれ、といたい。現状況は、何はともあれ総退却であり、だからこそ何はともあれ行動だ！ という論理なのか。それとも、もっと原理的に「行動」が考えられねばならぬというのか——。

谷川 わたしのいいたいのは、総退却・総転向的状況のなかで、微視的な「行動」で踏み止まらせようという、そういう意味ではない。それは矯正的「行動」になってしまう。総退却・総転向の、わたしなりの規定は、状況が全体として人間を押しつぶして行くので、その押しつぶされた内部を「先取」できる者のみか、状況に耐えられるのだ、ということなんだ。そのために必要な行動が、わたしのいう行動だ。たんなる覚悟のほど、だけでは、自己の退却・潰滅を内部的に認識し得ない。わたしは、内部的にそれを「先取」せよ、そういう「先取」を組織せよ、といたいのだ。行動の意味は、そういう仕事のなかで拡充し得る。つまり、人間の内部主体のなかで起っている問題として、現状況をとらえることが問題なのでね。だから、その意味では吉本君が、現在の外的現象のなかで現象している何々行動隊とか何々同盟式の「行動」を否定する態度はわかる。ところが、それが、「何もしない」という形で考えられ、潰滅せしむべき相手を潰滅させない仕方に加担するとなると、それはこまるのだ。

はじめから吉本批判になってきたが、——たとえば真に革命的な労働者がいると想定してみると、その男は、これから輝かしい未来があるとは考えず、世の中はわるくなるのだと覚悟して、そこからうじうじしたものに見えながら、中途半端な「行動」なぞ持ち込める世界でないと思う。新日本文学会の人たちのアクチュアリテイとかなんとかいうくすぐり半分の合言葉も、構造改良も、コケオドシで詐欺的な前衛づくりのポーズも持ち込めるものでない。ただ行動のつもりでやっている行動が「ほんとうのこと」たり得ないという思い、執念のみが入ってくる。そして文学のエレメンタリーなものをつくる。文学は、その点でよくにはありがたい。甘える場ではないが、ありがたいと思うのだ。その場ではじめて、ぼくは谷川さんのいう「根元的」革命にも、永久革命にも出会うだろうし、そこでそれらと向い合うということになる。対決するといっても、それはいい。

谷川 行動とは、カンパに立つとか、署名するとかいう単純な区分ではない。セミがあらゆる細胞を動かして、全身で鳴くような、そういうものに向おうとする、それが行動だという基準を立ててみる。するとそういう志向性はそれ自体否定できない。そういう基準で行動を考えるのだ。

村上 セミが鳴くのと文章を書くというようなことは違うと思う。人間がただ叫ぶとかうなるとかを考えても、セミとはちがう。文学というものを考えると、保田与重郎も中野重治も、ニイチエ、サルトルもさいごのギリギリでは、「いのちのまたけむものよ、うすにさせ、その子」みたいなところへ行ってしまふ。そういう意味でなら、セミの比喩も否定しはしない。

谷川 わたしのいうのは、全身的な行動があり、行動への志向があり、そういうものが在る世界があり、それはアクチュアリテイの

権力止揚の回廊

谷川 雁

—— 自立学校をめぐる ——

発端ほど怪奇なものはない。たとえ、それがうなぎのように籠の底でとぐろをまくにいたってやっと人々に捕えらるるにせよ。

去年の春だった。とつぜん部厚い手紙が私の愛する「陥落小屋」のたたきに落ちた。毎朝いたちが鼻柱をしめつけるような匂いを残しているそこらには、そのころまでこの毛皮用動物の領分ではなくてもっぱらどぶねずみの遊歩場であったのだが、おおらかな達筆で記されている表書きに、私はふといちちくさいあるものを嗅いだのだ。たぶんそれから、わが家に一匹のいたちがほんとうに住みつくようになったのは、山口健二と署名された手紙には、東京で過激思想学校というものを計画したことがある、と完了形でのべられていた。ああ、だからいたちの匂いがしたんだな。私は理性をこびこえて得心したものだ。実に、実はほんものいたちがすでに訪問していたのだ。だが、そういう私の幻覚がなかったら、自立学校なんてものがおっばじまったかどうか、あやしげなものだ。

私は生きた毛皮の匂いに飢えていたともいえる。状況は藻と水棲動物の関係のように、滑稽にもそっけなくゆらめいていた。そして過激思想学校！ へそうとうに優しい心臓からしみでたイデオロギ。これはV家を建てたいから、金を集めてくれませんか、と書き送った。そんな風になんと人間同志に訪れてくる、気のぬけた魔界のあけがたでもいったものが私は好きだ。手をにぎる家がこうしてうまれた。一枚の毛皮、いたちの臭気、成立不能の矛盾概念を発端におくとき、ありうべからざるものを追うイメエジの運動がはじまる。この運動自体は対象化することが可能である。いわば行動的イマジニズムというべき私たちの道は、大正行動隊から後方の会を経て、山口健二宅の老いぼれた巨大な駄犬を、ある朝私が「自立」と命名するにいたる。いたちのつきに犬だつて？ 話を合せているのではない。この犬はアメリカの軍曹かなんかが帰国にあたって家畜病院に棄てていった廃犬だった。そのまやかしの凶体とみすばらしさの奇妙な調和にほれてもらい受けた飼主は、ひさしい間、名前もつけずに寵愛していたのだった。飼主のベルソナがそこにある。その犬がひどいびっこで、二キロも歩くと抱きあげて帰らねばならないことを発見した私はいった。へこれ、名前をつけようか。

自立——びっこの概念。命名された犬はすぐ死んでしまった。そして私はいつのまにか過激思想学校を自立学校と読みかえていて、へあれをやるうか。ほら、れいの自立学校をさVと山口健二にいうようになった。彼はいつもの通りたてまえのよしあしには寛容である。手をにぎる家の戸口調査にきた警官がへ何の手をにぎるのかね、この家ではVといや味をいった話を聞いたりすると、うれしくてたまらないからだから。ともあれ、発端の怪奇という思想を再び適用すれば、脚のわるい老いぼれ犬と散歩しなかつたならば、私が自立学校の開校式で行った提案——狐拳式の学校運営法——などありえなかつたとおもわれる。

へ省略V

自立の観念は円環不能でなければならない、といった。だがそこに一種の媒介、絶縁しあうことによつて媒介する特殊な契機をさしはさむことは不可能ではない。

状況論からすれば、自立とはまず後退戦における内的闘争のイデオである。したがって自立する存在が対峙しているのは、外化された権力にはかならない。客観主義の立場をとるとき、自立もまた相對概念である、といったのはこの意味である。

ったん完全に陰面化し、別な視角からレーニンの権力像への接近を試みるよりほかはないとだけいっておく。

すなわち外化された権力によつて支配をうばいとるという脈絡よりも、支配されないという脈絡にアクセントを置き、すべての思想的な力の強制にたいする拒絶に積極的な力の源泉をもとめる立場をとれば、われわれはそこに外的権力の支配と異なる質、異なる方法をもつてする支配と被支配の円環関係を想定することができる。かかる思想の力の密室は、この世の機構の何にたとえることができるともふさわしいであろうか。私はそれを言葉の純粋な意味における学校と呼ぶよりほかに適当な表現を知らない。

すべての権力はその直接性をぬき去っていけば、究極のところ一つの学校と化す。そのゆえに理念としての学校は外的権力からもっとも速く、支配・被支配の円環性にもっとも近い。ところで支配・被支配の円環性から無限の距離に遠ざかろうとする力をもつて自立のエネルギ―とみなす立場から、われわれはそこにもう一つの軸を組み合わせる事ができる。

この図式から、自立者が無限の距離を通して外的権力に迫るさいの構図がおぼろげに暗示される。自立者と外的権力の拮抗関係を媒介するもの（むしろ、それは非媒介の媒介であるが）を学校とみなし、自立・学校という矛盾をあえて実体化しようとする理由がここにある。

つまり自立学校の内包は、自立学校はありうるかという設問そのものであり、それに無限の円環性を無限にのりこえる片面性という不変の方向係数をあたえ、かくして負の領域における権力の構造実験をくりかえし、そこから今日横行する権力対置論あるいはその単純否定論を止揚せんとするものである。

ことわっておくが、私がここで現在の権力関係と呼んだものは、権力の外貌を指しているのではなく、すべての権力または反権力の内部にある拮抗関係をいうのであり、その内部関係に今日の権力の特徴があると思うからである。もちろん、それは右にのべた理念的三角形の擬似的な対象化であるとともに、その構造は深く陰蔽されている。権力のポテンシャルがむしろ巨大な潜在部分によつてしか測られないという事態こそ、レーニンとわれわれの時代をへだてる地点であろう。

この秘密をばくろするため、もっとも非権力的な場で、すなわち直接的な負の領域で、機能の方向を逆倒する回路を試作し、それを自立者の片面性によつて破壊していくというのが私の構想である。そこで考えられる指標はつぎのようないくつかの視点である。

- (a) 権力を構成するそれぞれのパートが、いずれもある意味で全一的な力を持ち、別な意味では完全に無力であること。
- (b) それぞれのパートが全面的な緊張関係に置かれ、その経過が成員全部に公開されるものであること。
- (c) 権力の陽面的側面、つまりあるパートから他のパートへの指示機能は可能なかぎり第三のパートを通して媒介的に作用せしめること。
- (d) 権力の陰面的側面に重点を置き、指示されるパートにそれへの直接的な指示伝達の機能をもつ隣接のパートにたいする拒否権を持たせ、拒絶という機能に主要なアクセントを附与すること。
- (e) 総じて市民法的秩序における権利義務の観念を倒立させ、市民的権利を義務、市民的義務を権利とみなす意識体系を発展させること。

へ以下省略V